



子どもだけでは流れを変えられない。
だからこそ、

おやこ
父娘の記念受験

桜井信一

目次

はじめに	5
〈メッセージ〉	33
0 疑問	37
1 流路変更工事	68
2 中学受験	124
3 高い水準の世界	185
4 小学校6年生	319
5 最難関	358
6 最後の砦	396
7 疑問の答え	404
8 受験を終えて	408
おわりに	424
所有テキスト一覧	430

はじめに

唐突ですが——私は「中卒」です。今さら職を選ぶ気もない錆びた中年です。今の時代、一体どんな事情があれば中卒になるのかと、誰もが呆れます。もう何人呆れさせたかわかりませんが、口に出すかどうかは別にして例外なく皆が呆れるのです。

そうなることは百も承知なものですから、普段は自分からわざわざ学歴を明かすことなんてありません。しかし、今回は少し事情が違いそこを話さなくては始まらないのです。また呆れる人を増やしてしまうのは承知の上で、色々話そうと思います。

私が中学を卒業した頃はバブル経済が始まる直前でした。一億総中流という意識が定着した時代でしたから、金銭的な事情で高校に行けないという同級生なんて私の知る限りではひとりもいませんでした。私も含め私の知っている中卒たちは、決して同情できるような事情で中卒になったのではなく、ただただ愚かなだけだったのです。

最近、DQN^{*}なんて蔑称^{べつしょう}ができて非常に困っております。この言葉の定義が非常に曖昧^{あいまい}であるために、味噌も糞^{くそ}も一緒の扱いを受け、たとえどんなに親しくなっても迂闊^{うかつ}に中卒だと打ち明けることができなくなりました。DQNと知った途端、いや、中卒と知った途端、潮が引くように私の近くからいなくなるのです。

*ヤンキー、粗暴^{べつぼう}そうな風貌、非常識、知識が乏しい、低学歴などの人物を指すスラング。

ちなみに、中卒というのは「大卒ではなく高卒でもない」というだけで、別に犯罪者ではありません。多くの人が、そんな無茶な学歴の大人とは普段関わることがないでしょうから、私たちのような人間のことはあまりご存知ないでしょう。無理ありません。私のまわりにも中卒なんてほとんどいませんから。

私の名前は、桜井信一さくらいしんいち。短所は勉強と仕事が苦手なこと、長所は短所の改善を潔く諦めていさげよいることです。戦後復興期ならいざしらず、今の時代に中卒だなんて世間はロクなイメージを持っていないでしょう。反社会勢力の関係者を疑う人もいれば、パチンコに明け暮れる無職の中年と決めつける人もいるかもしれません。ただ漠然と「常識がない大人」という括りくくりで、私たちとは一切関わりを持たないようにしている人もいるはずです。かく言う私も、自分以外の人で中卒と聞けば、やはりまともなイメージを持ちません。つまり、中卒の私自身が世間の持つそのイメージに反論などないのです。

このようにロクなイメージがない中卒ですが、その脱線度合いもカラーも多様なものですから、先ほどの種の中卒かを知っていたただかないとちよつと色々不都合なことが多い話を今から始めようとしています。私は闇の世界で活躍しているわけでもなければ、パチンコやスロットで生計を立てようとするほど同じ姿勢を維持することが得意ではありません。私はこんなやつだと上手く説明

したいのですが、風貌をイメージしていただくのは容易いことではありませんので、「私」に一番近いものにたとえておきます。

「団地の自転車置き場に長く放置されている古い自転車のような中年」

こういうやつを見かけたことはありませんか。なければもう自転車と思っていただけでも結構です。所詮そのレベルですから。

要するに、古い自転車と同様に私にもこれといって取り柄がなく、リサイクルショップに並んでいる自転車のようにほとんど価値がありません。古い自転車なんて誰も気に留めないのと同じで人を威嚇するような風貌ではありません。40年以上生きてきました、得意分野を活かして活躍した経験もあります。15歳で社会人となってからは数えるのも面倒なほどの転職を繰り返しました。今は、転職が恥ずかしい歳になり仕方なく落ち着いているというか、もう選ぶのも面倒になったというか、選ぶことが無意味であることに気付いたというか……、そのあたりは話の途中で追々ご理解いただけると思います。中卒というだけで全うな職に就いていないと思われるのは避けたいものですから、現在の職業をここに書きたいところですが、諸般の事情により今は明確にするのをやめておきます。

妻は、桜井香夏子かんなこといひます。箱詰めなどの軽作業のパートを長く続けている三十代後半の中年女性です。カッコよくアラフォーといひたいところですが、小学館が発行するデジタル国語辞典「大辞泉」によると、アラフォーという呼び方は「40歳前後の人」というよりも、「1980年代半ばを高校・大学で過ごした40歳前後の女性を指した」ところからきているようで、広義に解釈しても高校生活や大学生活の経験を持たない者が使うのはふさわしくないようです。つまり、アラフォーやアラサーは年齢と同時に中卒かどうかを判別できるように開発された便利なワードのようです。まったく……、高學歷の人たちが考える手の込んだ學歷差別にはうんざりします。

ということ、アラフォーとは呼べない三十代後半の妻も——「中卒」です。母親が中卒となれば、それこそロクなイメージがないかもしれません。タンクトップからタトゥーが顔をだしているヤンママの10年落ちをイメージさせてしまうかもしれません、そんなことはありません。ヤンママの目印である「母親にしては妙にオシャレ」という点、妻にはまったく当て嵌まりません。妻も私と同様に誰も気に留めないどうでもいいやつなのです。一応ここでも「妻」をこのようにたえておきます。

「シャッター商店街の中にあるラーメン屋の事情のようなオバサン」

もう都会ではあまり見かけなくなりましたし、見かけたとしても閉店しない事情までご存知の方

は少ないでしょう。私も詳しくはわかりませんが、もう閉めることすら面倒なのかもしれません。そんな妻ですが、どうせ出番はあまりありませんので、イメーじしにくければ無理に想像していただく必要はありません。長所と短所は、豊かな暮しではないのになぜか長生きしたいという諦めの悪い性分でしょうか。

娘は、桜井佳織かおりといいますが、どんな子かはこの物語を読むうちに少しずつわかってもらえるだろうと思いますが、既にお気付きの通り「純血の中卒の子」です。さらに、両親が中卒というだけではなく、祖父母も中卒という「生粋の中卒の子」なのです。つまり、語彙ごいや数式すうしきがあふれかえった家庭環境とは程遠い世界で育った子です。ハウスダストが原因で鼻炎が悪化し、蓄膿症ちくのうに悩まされながら※ジエネリック医薬品で生き抜いてきた子なのです。私と同様にできるだけ正しく娘をイメージしていただきたいので、お手数ですが、そつと目を閉じて想像してください。みなさんの近所にもきつといる『団地の公園で遊んでいるその辺のガキ』の顔かたち、言動を。

それが、——この物語が始まる『前』の佳織です。

*

2013年2月1日(金)午前8時、真新しいスーツ姿の大人に化けた私と、買ったばかりの

コートに身を包んだ小学校6年生の佳織は、東京都文京区の坂の上に来ていました。全国最難関女子中学といわれ、一年生の生徒数の約3割が東京大学に合格し、大半が早稲田大学・慶応義塾大学に合格してしまうという化け物のような合格実績を誇る超難関中学、桜蔭学園の中学受験に参加するため私たち父娘はそこにきていたのです。

ところで、いったいなんの話なんだ、先に言えよって？——言うまでもなく、中卒の子が最難関中学を目指したっていうだけの話です。

「なんだ！ 記念受験かよ！」と罵声はのせいを浴びる覚悟で先に自己紹介から始めました。そのわけは、これから始まる物語がすべてドキュメンタリーだということを知った上でここから先を読んでほしかったからです。もちろん話が無茶苦茶すぎてすべて信じてもらえないかもしれませんが、しかし、この物語にでてくる話はすべて実際の出来事であり、脚色して大袈裟おおげさにしてある部分は一切ありません。

親の学歴のことだけなら世の中には同じようなケースが存在するかもしれませんが。中卒だって立派な事業家もいれば芸能人やスポーツ選手だっているでしょう。最高の教育を受ける環境が整っていれば、両親が中卒でも我が子を最難関校に合格させることはできるかもしれません。——しかし、我が家のケースは、父は錆び、母は寂さびれていたのです。

『私たち父娘は桜蔭学園の中学受験に参加しました』

その言葉通り、「父娘^{おやこ}」で受験したのです。私たち父娘は、一緒に勉強し、一緒に学力を上げ、同じ目標を持って2月1日まで頑張りました。父娘同じ勉強量で――。

中学受験をすることにした私たちは、たくさんの塾のパンフレットに目を通しました。いくつかの塾に見学にも行きました。入塾テストのようなものも受けました。しかし、娘の学力ではどの手段を選んでも桜蔭中学校に合格できないと判断した私は、佳織に「親塾」という提案をしました。^{*}特殊算どころか分配法則すらできなかった私の指導を受け、最難関中学を目指すことにしたのです。

「父さん、約分得意？」

「得意だよ、もちろん」

「じゃ、通分は？」

「できるよ、それくらい」

「ふうん、じゃ大丈夫かもね」

「大船に乗ったつもりでいなさい」

「どういう意味？」

手短^{てみじか}に意志確認を済ませ、私たちはさっそくその船を漕^こぎ始めたのです。

さて、これがただの作り話なら、当然のことながら主人公の佳織は現在桜蔭中学校に在学中ということになりますが、ドキュメンタリーなのでそうはうまくいきません。佳織は別の中学校から、

*中学受験算数で使う特殊な解き方。方程式を使わずに図や公式を使って解く。

桜蔭中学校に進学した同い年の子たちとは別の航路を通り、東京大学の入学試験会場で合流するために、毎日を忙しそうにそして楽しんで過ごしています。

物語は、私の「生い立ち」に少しだけふれ、佳織が受験をするきっかけから現在に至るまで続きます。作り方はいたって簡単。ワードや自分宛メールに記録しておいた、佳織の中学受験の学習記録を編集したのです。そのすべてがドキュメンタリーなのです。

但し、私たち家族や応援してくれた人たちの個人名は変えさせていただきました。在学中の学校名も伏せてあります。この物語を読んで、もしかして……、と私たちの顔が浮かんだ友人・知人の皆様、どうか気付かないふりをして見守ってください。そして、その他の皆様も私たちが誰なのかを突き止めようとしないでください。少なくとも、佳織が大学受験を迎える日まで。

もうひとつお願いがあります。この物語では、私たち夫婦を指す表現として「中卒」という言葉を使っています。世間には中卒という学歴などと関係なく活躍しておられる方々がたくさんおられることでしょう。そのような方々を指すのではなく、あくまでも私たちの持つイメージの中での「よくいる中卒」を指しています。私たちのイメージとは異なる中卒の方々、また私たちのイメージ通りであっても中卒という言葉に嫌悪感けんおかんがある方々、どうか洒落しよれのひとつとしてお許しください。また、高学歴の方々にとって当たり前のことも、私たちのような中卒には初耳のことがたくさんあります。みなさんのまわりに中卒がいなかったために、私たちがどの程度の知識を持っているのか想像できない方がおられるかもしれません。私たちがあまりにも無知であるために失笑を買うこともあ

るでしょう。考え方が偏^{かたよ}っていると思われる方がおられるかもしれませんが。常識がないとお叱りを受けるかもしれません。誤字脱字、誤解、読みにくさなど、不安はたくさんありますが、私のこれから的人生のためにもすべて自分で書きたいと考え、第三者の添削・校正・加筆などを受けておりません。また、受験を通して知った語彙や慣用句は忘れないためにも極力使うようにしています。知識が浅いために使い方を間違^{まちが}うこともあるかと思えます。無理に難しい文章にしようと背伸びしている様子が滑稽^{こっぴ}にうつるかもしれません。できるかぎり注意して書きますのでどうかご理解ください。そして、私たちが選んだ勉強法は何かのテキストに示されている場合はその旨を明記しておきました。それ以外はすべて我流で考えたものであり中学受験塾等からアドバイスを受けたものではありません。よって、専門家の方がみるとひとこと言いたくなることも多いかと思いますがその点もどうかご理解ください。

*

2013年2月2日(土) 桜蔭学園合格発表、西館前に大勢の人が集まっていた。テレビカメラもいる。そのちょうど真ん中付近に私たち父娘はいた。まもなく合格発表の時刻。西館二階のガラス越しに悠然と合格発表の瞬間をみている人がいる。校長先生だろうか。受験票が自宅に届いてから何度も何度も目に焼き付けたはずの受験番号、忘れるはずのない受験番号を今一度確認するため、

スーツの内ポケットにある受験票をそつと取り出し、佳織に確認させた。佳織は目で領き、すぐに正面を向く。午後2時きっかり、運命の場所。運命の時刻。佳織の人生の岐路。——学校関係者らしき人たちが軽く一礼し、大勢の人の前に現れた。すぐに受験番号が書かれた大きな紙を貼りだす作業を始める。その数枚目が貼り出される瞬間……、一瞬まわりの音がすべて消えた。時が止まった。風が止んだ。

異常な努力は実ると信じていた。

受験の神様はいると信じていた。

しかし、テーブルから落ちたグラスがあっけなく粉々に割れるように、いくら悔やんでももうどうにもならないように、娘の受験番号はなかった。

気がつけば、いつものように時を刻んでいる。寒さを感じない風も吹いている。まわりの音が私たちの胸を突く。いつも通りの風景、いつも通りの私たちに連れ戻されてしまった。

こんな時、父親は我が子にどんな言葉をかけるのかは知らない。いや、知っていても使わなかっただろう。私は受験生の父親ではなく、私も受験生だった。まさに親子の受験だった。私たち父娘の合格発表だった。しかし、私たち父娘の受験番号はなかった。

（俺たちは落ちたのか……。そっかあ、落ちたのかあ……。ん？　なんだこれ？　この気持ち、こ

の感覚、俺の人生の中で一度も味わったことがないぞ。残念とか悔しいとかがっかりとか、そういう類ではないな。なんなんだこれは?) いまだにその瞬間の感覚をうまく言葉に置き換えることができない私は、適当な表現がみつかるまで、とりあえず『シヨック』という陳腐な言葉で片付けている。よく考えると、人生でこれほど大きなシヨックは経験したことがなく、もっと考えると、それ以前にこれほど頑張った経験をしたことがない。

私たちはいつの間にか無言で桜蔭坂を下りていた。我が子に慰めの言葉ひとつかけてやる能力のない父親と一緒に、佳織は坂を下っていった。有名塾のチラシを堂々と受け取りながら憧れの坂を下ることは許されなかった。

はじめて口を開いたのは佳織の方だった。小さなこぶしを握りしめ、自分が歩いている地面をみつめながら「この坂もこれで最後」とつぶやいた。私はそれでも無言のままだった。数分しか経っていないのに言葉なんて見つかるはずもない。しかし、これで最後と念を押されると見ておこうと思った。見ておくべきだと思った。ゆっくりと振り向いたときに見上げた桜蔭坂は今ままで一番険しい坂道にみえた。願書を提出しにきたときはこれほど急な坂じゃなかったはずなのに……。

佳織は一度も振り向かなかった。一度も振り向かないまま大通りまで歩いた。桜蔭坂を下りる娘の横顔は12年も育ててきて初めて見る横顔だった。私の胸を何者かが鷲掴みにしている感覚。これもまた適当な表現がない。しかし、ひとつわかっていること、それは父親になって初めての感覚だということ。

*白山通りから桜蔭学園までの急な坂道で「忠弥坂」が正式名。

*

桜蔭中学校の入学試験には、4教科の試験だけではなく面接もある。しかも、本人の面接以外の親の面接もある。そして、その面接には家庭調査票のようなものの提出もある。出願時には小学校の通知表の提出もある。それらも合否の参考にするらしい。

まず、親の面接があることが大きなネックだった。おそらく他の親はかなり貫禄かんろくがあるのだろう。いかにも高学歴っていう顔をしているのだろう。私のような土木工事のオッサンみたいな輩よびがたはいないだろう。見た目だけでも不利なのに、その面接時に提出する家庭調査票のような書類の存在が私を追い詰める。家族の氏名の右側にある備考欄はいかにも「学歴を書いてね、職業を書いてね」と言わんばかりのスペースだ。横幅は「東京大学○○学部卒業、○○省勤務」というパターンに合わせて長さを決めたのだろう。

願書提出時にその書類の存在を知った私は目の前が真っ暗になった。こんななんて書くんだ。これが原因で不合格になったりしたら佳織になんて説明するんだ。しかし、嘆なげいている場合じゃない。なんとかしなければならぬ。そこで私は、弁護士会の法律相談センターに駆け込んだ。

「すみません、ちょっと法律的なことが知りたいのですが、入学試験の提出書類に適当な大学名を書いて学歴を偽いつわれば犯罪になりますか？ 入学後にそれを理由に退学処分にする権利って学校側に

ありますか？」真面目に相談する私に弁護士の先生は言う。

「お子さんが中学受験ですか。懐かしいなあ。学歴なんて偽らなくてもいいじゃないですか。堂々と書けばいいんですよ。事情があつて大学に行かなかつた人なんて世の中に沢山いますよ。そんなことで不合格にする学校なんてこちらから願ひ下げだ、くらしいの気持ちじゃないとだめですよ。ところでどの中学を受けますか？」

俺は法律相談に来たんだよ。人生相談に来たんじゃなく。懐かしいって誰の話だよ。おまえか？子どもか？孫か？大卒じゃないイコール高卒っていう前提で物事を考えるなよ。こちらから願ひ下げつて、法律相談に自分の価値観を入れるなよ。それなんだよ、最後の質問は。それ好奇心だろ。こんなやつに学校名を迂闊うかつに喋つてしまつて、「学歴詐称さじょうの恐れがある受験生がいますよー」とでも学校に匿名電話とくめいされたらたまつたもんじゃなく。

よく考えると私の法律相談は大卒と偽ることが前提の話。かといつて、中卒と書くわけにいかない。高卒と書いて中途半端に偽るのも得策じゃない。考えに考えた挙句、「空白」という妙案を思ひ付いた。書類をよく見ると「備考」と書かれたその横に（ご自由に）と書いてあるのだ。この解釈が問題だ。おそらく「個人情報保護法の観点から学歴や職業の記載を強制することができない学校側の事情を察していただける方のみご記入ください。そこを理解できない人は覚悟の上でどうぞ（ご自由に）」と言いたいのだろうが、私がそれを察することができなければいいだけこと。学歴を書けという指示も職業を書けという指示もない。つまり、何を書くかわからなかったということ

にすればいい。健康状態は良好だし、趣味は特になし、タバコは吸わないし……って、履歴書じゃないんだから備考欄に書くことじゃないか……。でもそうだよ、俺は勘違いしたんだ。強引に有耶無耶にしているうちになんだかそんな気もしてきた。そんな気がどんな気かもよくわからなくなってきた。もし、面接で学歴や職業を訊かれれば話題を変えればいい。コミュニケーション能力が低いふりをすればいいだけのこと。というよりいつも通りにしていれば能力の低さを発揮できる。そうだよ、よく考えたと訊いたことと無関係なことを答える人なんて世の中にたくさんいる。特に珍しいことではないだろう。——自問自答の末、私は右側をすべて空白で提出することにした。

本番の保護者面接では私の学歴についての質問はなかった。主に志望理由についての質問だった。備考欄で散々悩まされたその書類には志望理由を書く欄もある。しっかり記入してあるのにどうしてまた訊くのかと思うが、本当に知りたいことはその質問内容そのものではないのかもしれない。その志望理由についての質問に対する回答でややくじったものの、一人当たりの時間が短いことが幸いし、次の質問に移った。そこでとうとうきた、とうとう職業についての質問があった。

しかし、しつかり作戦をたててある。慌てることはない。もし面接で職業を訊かれたら、総務省統計局のホームページに記載されている「日本標準職業分類」の「大分類」を答え、もし突っ込まれたら「中分類」を答えるという作戦でいくことにしよう。もし、さらに踏み込んできたら……、コミュニケーション能力の低さを発揮しよう。そう考えてきた私は、非常に広い意味で職業を答え

この面接を乗り切った。

通知表も不安だった。2学期までの欠席遅刻日数だ。夜は私と一緒に勉強するために、耳鼻科や歯科、インフルエンザの予防接種などはすべて平日の午前中に行かせていた。そのため佳織の通知表にはかなりの遅刻欠席があったのだ。

しかし、実際に入学試験を受けてみて、そのすべてが杞憂^{きゆう}だった。面接や通知表は余程のことがない限り合否に影響せず、単純に4教科の試験結果勝負だと強く感じた。そもそも合否に影響するような面接方法じゃない。面接で何かを採点しようという雰囲気じゃない。そりゃ親が「中卒」というのは余程のことなのだろうが、普通は受けにこないだろうし、受けたとしてもわざわざ書かないだろう。あれはどう考えても念のための確認。小指が欠損していないか、文字盤が全面ダイヤのロレックスをしていないか、携帯電話の番号がゾロ目になっていないか、所詮その程度の確認だろう。通知表も同様に、極端な不登校を出席日数で確認しているのだろう。つまり、桜蔭中学校の入学試験は本番のテスト結果次第という単純な選抜方法だ。——少なくとも私はそう思う。

その結果が「不合格」だった。保護者が待機する場所で、子どもたちが今まさに解き終えた試験問題が配布された。十分練習してきた算数も、弁当箱^{*}と呼ばれる解答欄に記述する国語も、不安だらけの社会・理科も、そのすべてが妙に説得力のある内容だった。入試問題の相性が悪かったとか、

*マス目のない解答欄のこと。外枠があるだけで罫線もない。

苦手な問題ばかりが出題されて運がなかったとか、そんな言い訳がわいてこない最難関にふさわしい公平な入学試験だった。負け惜しみなんてでてこないほどの難関だった。その難関にふさわしい努力を私たちはした。

しかし……。

『何が足りなかった』

その『何か』が今ならわかる。躍起やつきになって受験勉強しているときは見えなかったが、今ならほんやりと見える。全力で走っていると見えない景色も、スピードを緩めたゆる今なら見えてくる。

——私たちは、確かに足りなかった。

*

2013年1月23日。受験まであと9日、最後の追い上げ。

なかなか過去問を解くレベルに達しなかった私たちは年明けの1月に猛追した。年明けからはとうとう過去問に挑むところまでできていた。翌日佳織が解く過去問はすぐに私が解説できるように前夜のうちにすべて予習を済ませておくという手順だった。過去問は本になっている。それをいったんコピーし、実際の配置にならべかえて再度コピーし、本番と同じ状態にする。解答用紙の準備もしなければならぬ。それだけでも結構大変なのに、それを予習して説明できるようにしておかな

ければならないのだから時間がいくらあっても足りない。佳織の就寝後に明日の準備をするため1月は過酷な日が続いていた。するとこんなややこしい問題が登場し朝方まで腕組みをして考え込んでしまった。

Ⅲ かずおくんのビデオテープレコーダーには60分用テープに60分間の録画ができる機能（標準モード）と、60分用テープに120分間の録画ができる機能（2倍モード）の2つの機能があります。かずおくんは、このビデオテープレコーダーで3つの映像A、B、Cを録画することになりました。A、B、Cの映像の長さはそれぞれ5分10秒、2分56秒、10秒です。このとき、次の問いに答えなさい。

(1) かずおくんは、ある長さのビデオテープにACBCACBC……となるように、AとBの間にかからずCを入れながらA、Bをこの順に交互に標準モードで録画しました。4回目のAの録画が始めたところ、最後まで録画することはできませんでした。このビデオテープに録画できる時間は標準モードで何分何秒より長く何分何秒より短いですか。

(2) 次に、かずおくんは60分用テープにA、Bのみをこの順に交互に録画しました。はじめは標準モードで録画していましたが、何回目かのBから2倍モードで録画したところ、10回目のBが終わったときにビデオテープが標準モードで43秒残りました。2倍モードで録画を始めたのは何回目のBからですか。

(平成20年度 桜蔭中学校)

解説を読んでも何がしたいのかよくわからない。そもそも問題の条件整理ができずちんぷんかんぷんだ。

翌日、この大問が含まれている平成20年度の過去問に佳織が挑戦。Ⅲ番で躓いて大幅に時間を割いてしまうより、さっととばして他の問題を確実に得点してほしいと心の中で祈りながら問題用紙と解答用紙を机の上に置きストップウォッチを押す。そして気が散らないように席を外した。1点でも多くとってほしい、頑張れ佳織。

50分後、「よし、終了」という私の合図と同時に佳織は鉛筆を置き、ふうと息を吐く。解答用紙を拾い上げた私は、真っ先に大問Ⅲに目を遣った。

「えっ？ 佳織、このⅢ番できたの？ どういうこと？」解答用紙を掴んだまま私は目が点になった。目が点になることって眉が上がることだとこのとき初めて知った。

私が一晩中悩んだ問題、解説を読んでもなかなか理解できなかった問題、いや、そもそも問題文が何を言っているのかよくわからなかった問題。私と同じクオリティの脳を搭載しているはずの佳織がそれをあっさり解いている。

「佳織、この問題よく解けたね、びっくりしたよ」と興奮気味に言う私だが、佳織は単にマルかバツかが気になって仕方ないようだ。

「マル？」

「いやあ、マルだよ。すげーな」

「え？ 少しややこしいけど連立方程式でしょ？ しかも(1)は引き算だけだし」
 「そうか？ 問題の意味がわかりにくくなかった？」
 「うん、こういうのは大丈夫かな」

受験まであと1週間となった夜、またもや私を悩ませる問題が登場する。

Ⅲ あるお菓子屋さんでは1個120円のお菓子を買っています。6個入りは箱代が80円、9個入りは箱代が100円です。

このとき次の問いに答えなさい。

6個入り						
9個入り						
ばら売り						

- (1) 6個入りと9個入りの菓子箱はそれぞれ何円ですか。
- (2) 6個入りと9個入りの菓子箱とばら売りを何個かずつ買ったところ全部で8780円になりました。6個入り、9個入りの菓子箱とばら売りを、それぞれ何個ずつ買いましたか。考えられるすべての場合を答えなさい。ただしばら売りは20個以下とします。解答ら
んは余分にありません。

(平成16年度 桜蔭中学校)

不定方程式はいくつかのパターンを克服済だが、どういうわけかこの問題は様子が違う。解説を読んでもすっきりしない。難関というのはこういうことなのだろうか。典型問題に少しスパイスを加えただけで、ある人にはスパイシーな中辛に、ある人には限界をこえる激辛になってしまうような問題を出題してくるのが難関と呼ばれる所以なのだろうか。しかも、桜蔭中学校の算数は大問5つのパターンが多いのだが、たまに大問が6つあるのだ。この平成16年がそうだった。

しかし、佳織はこの問題もあっさり正解し、私の眉が上がる。

「佳織、この問題どうだった？ 難しかった？」

「うーん、解答欄が余分にあつたから、あと1個くらい答えがあるのかなと思って必死に探しちゃった。結局3つだけだとわかったときには時間が結構過ぎちゃって……。大問が6つあるから余計に慌てて時間が足りなかった」

解答用紙を掴む手が踊ろうとするのを私はぐっと抑えた。娘は土壇場でとうとう辿り着いたのかもしれない。ひよっとすると本当に合格するのもかもしれない。少なくとも私より学力が上になったのは間違いないさそうだ。まったく手ごたえがなかった辛い日々^なに立ち向かい続けた娘を、神様はどうとう認めてくれたのかもしれない。

ずっとずっと、実は不思議だった。この子はちょっと変わり者なのではないかとさえ思っていた。あまりにもできなさすぎるのに、まったく諦めようとしない。最初は「この子は本当に努力家だな

※文字（未知数）が複数あり、答えが幾通りかある方程式。

あ」と目を細めていた私も、10問中8問も9問もバツになる日が続くと心が折れてしまいそうになるときがある。それでもめげずに頑張る娘が馬鹿に見えてくるときがある。それでもページをめくろうとする娘の頭は少しおかしいのではないかと思ってしまうときがある。諦めるという発想がないということは異常なことなのではないだろうかと心配になってしまふのだ。その心配が一気に吹き飛ばほどの手ごたえをこの土壇場で神様はくれた。頂いたはそんなに遠くないのかもしれない。

そんな期待のなか臨んだ入学試験本番。満足そうな表情で会場をでてきた娘をみて、ぎりぎり間に合ったのではないかとという予感がした。佳織は最難関に届いたのか届かなかったのか……、明日まで待つしかない。そうしてゆつくりと時間が流れた。

しかし、私たち父娘の入学は許可されなかった。昨日の予感は勘違いだった。合格者に必要なレベルはもう一段上だった。最難関だけに存在する砦とりでがあったとは、そのときの私たちには知る由よしもない。

私たちは、中学受験の専門家の助言を受けて受験に臨んだわけではなく、プロの家庭教師をつけたわけでもなく、通信教育を利用したわけでもない。中卒の私が我流で学力を押し上げる方法を必

死に探し求め、市販のテキストと大手塾の中古テキストを利用し、最難関校に挑戦できるレベルまで学力を押し上げ、いや、父娘と一緒に学力を上げたのだ。

最後は驚くほどよく伸びた。勉強つて本当にできるようになるんだと実感した。しかし、手ごたえを感じる時期が遅かった。「よし、いける!」と思うのが遅すぎた。合格者と不合格者の境目に存在する最後の砦に気付くことができなかつた。最難関だけに存在する砦に気付かず、最後の最後で攻めあぐねてしまった。

*

小学校5年生の6月に受けた四谷大塚の「※全国統一小学生テスト」

4教科の偏差値 41.●

全国順位 20●●●位 / 26363人

中卒の子から優秀な子が生まれるなんて希望は一切捨てなさいといわんばかりの結果。親に無理矢理受けさせられている子もいるだろう26363人の中で、精一杯受けたのにこの結果である。中卒の子であることを科学的に証明している順位である。数ある私立中学の中から偏差値表の下の方だけを検討せよと四谷大塚が示唆しきしたようなものである。

その科学的な結果を目の当たりにした日から3ヶ月後の9月1日、私たちは十分話し合った結果、

※株式会社四谷大塚が主催する無料公開テスト。全国で10万人以上の小学生が受験するという。

ててこい、未来のリーダーたち。

四谷大塚

成績表

全国統一
小学生
テスト
— 四谷大塚 —

会場コード		会場名		学年	小5	性別	女
受験番号		テスト実施日	2011年6月5日	氏名			
成績一覧表							
教科	満点	得点	全国		都道府県別		男女別
			偏差値	平均点	順位/受験者数	平均点	順位/受験者数
算数	150		77.7				
国語	150		68.9				
理科	100		47.5				
社会	100		52.0				
2教科	300		146.7				
3教科	400		196.0				
4教科	500		248.3				

※模試を受験した先の塾関係者なら
順位などで個人を特定できるため
数字の一部を伏せてあります。

「親塾」という選択なら可能性があるかもしれないと判断し、最難関中学受験に向けて物理的に受験勉強をスタートしたのだ。「示唆」の意味がわからなかった時点では妥当な判断だったと思う。

小5の秋からスタートするのは遅いということは十分わかっていた。偏差値41の子が努力でどうにかなるものではないということもたくさんさんの専門家から十分に聞かされていた。しかし、娘と何

度も話し合い「やろう！」と決断した。いや、「こうすれば可能なんじゃない？」という結論に至ったのだ。

スタートした日から受験まで一日も休まず勉強した。旅行どころか身内の冠婚葬祭かんこんそうさいも父娘で欠席するという常識のなさ。放課後から深夜まで毎日勉強した。一度もテレビを観ることがなく、公園にも一度も行かず、母親の買い物に一度もついて行かず、毎日毎日勉強した。膨大な量の問題を父娘と一緒に解いた。いつもお父さんとずっと勉強している娘はファザコンと学校でからかわれ仲間外れになった。さらに子どもだけでなく家族も町内会から仲間外れになった。夜中にどうしても眠くなるとふたりでコンビニに出かける。目を覚ましに行くのだ。真夜中に親子で歩くその異様な姿を何度も見られ、小学生を毎晩夜中まで勉強させているそうだと噂になった。確かあまりできる子ではないはずなのに塾にも行かず勉強している風変わりな親子だと気味悪そうにされる。気付けば誰も挨拶してくれなくなっていた。それでも娘も私も徹底して演習を繰り返した。仲間外れはあと少しの我慢で、錆び寂れた仲間とはこちらから外れてやると心に決めてひたすら演習した。私たちは同時に学力が上がっていった。今から考えると無駄な部分がたくさんあり、遠回りもしていた。しかし、その時は必死だった。平日7時間以上、土日祝13時間以上を万全の体調管理のもと必死に頑張った。ほんのわずか先の未来が楽しみで、毎晩「え？ もう1時？」なんていいながら慌てて寝ていた。

しかし、私たちは最難関には届かなかった――。

その道程を書いたこのドキュメンタリーは、今の私たちを通りすぎ、私たちの目的地で完結させたいと思う。中学受験では完全に二人三脚だった。しかし、これからはどんどん父娘の学力差がついていく。昼間学校で学んでくる佳織には敵かなわなくて、目的地付近になると私はもう勉強していないかもしれない。それでも私たち父娘の目的地であることには変りないと思う。私が佳織を見失うことも、佳織が目的地を見失うこともきつとないだろう。だって、——私たち父娘の動機はひとことと説明できないようなものだから。そして、挫折ざせつを得意として生きてきた親が、その挫折する原因と向き合い、挫折を防ぐために選んだ最良の手段だったから。

私は、伝えるというかたちで確認したい。

私たちと同じようにもう中学受験は通り過ぎたという人はたくさんいて、これから中学受験を考えている人もたくさんいて、中学受験なんてまったく無関係だけれど、どこかの世界で私たちと同じように下剋上を夢みている人もいて、今まさにそれぞれの目的地に向かっている最中の人、もう目的地に到着して一休みしている人、目的地からさらに高みへ向けて走り出した人、そして、目的地へ向かうことを諦めた人、いろんな親子の挑戦や葛藤かとうがきつと存在する。そんな人たちに伝えるというかたちで、私自身も確認したい。私たちの挑戦は正しい無茶だったのかどうかを。文字にすることで見えてくることってたくさんあるはずだからきつと確認できる。私たち父娘の挑戦も葛藤も……。

「私たちはなぜ中学受験をする必要があったのか」

「私たちはなぜ親塾という選択をしたのか」

「私たちはなぜここまで勉強しなくてはならなかったのか」

「私たちの工夫は間違っていたのか」

「中学受験はどんな弊害があるのか」

「最難関に辿り着くにはどうすればいいのか」

できるかぎり具体的にしていくことで、もう一度確認できるだろう。何が足りなかったのかを伝えることで、改めて反省できるだろう。合格者と不合格者の境目に存在する最後の砦の存在を伝えることは、きっと私たち父娘のこれからにも緊張感をもたらしてくれると思う。

エリートお父さんの子育て日記は一部の人にしか参考にならない。エリートの子どもが最難関に合格しても素質の違いを知るだけで終わるだろう。だからといって、奇跡の合格法などの類もあてにならない。じゃどうするんだと私たちは右往左往し親塾を選択した。真剣に現実を理解し他の方法ではダメだと判断した。もし他の方法ならば、貴重な2月1日という日に桜蔭中学校を受験することはなかったと今でも思う。四谷大塚の教えてくれた立ち位置で終わっていたと思う。馬鹿にされるのは覚悟の上で正直な気持ちを言いたい。桜蔭中学校に合格した子たちに失礼なのは承知の上で正直な気持ちを書き残したい。

※東京都・神奈川県私学協会が定めた入試解禁日が2月1日。この日一斉に桜蔭・女子学院・雙葉・早稲田実業・フェリスなどの入学試験が行われるためいづれか一校しか受験できない。但しこの日が日曜日になった場合はこの限りではなく「サンデーショック」という現象が起きる。

「届かなかった場所ではなかった」そう思う。

「多くの子にチャンスがある」そう思う。

合格者と不合格者の境目に存在する最後の砦の存在を^{あらかし}予め知っていれば、

「狙わない手はない」そう思う。

不合格になった私たちでは説得力がないのは承知の上で伝えたい。

「受験まであと一年半以上あり、四谷大塚の偏差値が40以上あり、大手塾へ通わせ親が本気でサポートすることが可能であり、桜蔭中学校に合格したいと親子で本気になれるのならば『狙わない手はない』そう思う」

一見あの240人枠は既に^{しんどう}神童たちで予約満席のようにみえるが、8割の指定席に2割の自由席があると私は思う。2割の自由席は当日まで未確定だと私は思う。その理由は次の二点にある。

- 一、入試問題が努力型にもチャンスがあるようにつくられているという点。
- 一、2月1日の一度しか受験できないという点。

この二点が変わらない限り、2割の自由席は「努力席」として存在し続けると思う。この席

は神童だけではなく児童にもチャンスがあり「狙わない手はない」そう思う。

私たちは最難関中とはまったく逆の世界にすむ父娘であり、私たちの世界からはエリートたちの背中さえみえなかった。100%無理、100%あり得ないという暗黙の了解のなか、常軌を逸すれば可能という信念のもと地図を持たず海を渡ろうとした。方角は「あのあたり」と漠然としてい
るだけ。それでも私たち父娘は渡る必要があった。

そのプロセスをご覧いただきたい。

常軌を逸するということは、ここまで狂うということ。

ここまで狂ってもまだ簡単に渡らせてくれなかったということ。

しかし、狂ってはじめて何かがみえることもあるということ。

さて——、みなさんは、狂った中卒に感化されない自信があたりだろうか。

〈メッセージ〉

中学受験で不合格になった人に「塞翁が馬」^{※さいおうがま}と慰める人がいます。少し違うのではないかと私はいつも思っています。「高校受験、大学受験でリベンジ」と慰める人がいます。かなり違うのではないかと思うのです。少なくとも私たちには「塞翁が馬」なんて慰めにならないし、「リベンジ」なんて何の励みにもなりませんでした。おそらく中学受験の目的が違うのでしよう。

「中学受験には失敗したけれど、最終的に東大に入った人はたくさんいるよ」

「最難関には合格できなかったけれど、第二志望の中学校に進学し第一志望の不合格をバネにして6年後見事東京大学に合格した人がいるよ」

「いったん公立中学に進学したけれど高校入試で見事リベンジを果たした人がいるよ。しかも中学受験で不合格になった学校よりも高い偏差値の高校に合格した人なんてザラだよ」こういう慰めばかりが聞こえてきます。

それ……、羨ましいという感覚も立派だという感覚も私にはありません。私たちが望んだのは最難関の中学受験であり、高校受験や大学受験ではありません。私は中学受験をただの通過点だとは思っていません。非常に重要な分岐点だと思っています。

「桜蔭学園で6年間を過ごし東京大学に合格すること」この目的の後半部分だけを望んでいたわけ

※人生における幸不幸は予測しがたいということ。幸せが不幸に不幸が幸せにいつ転じるかわからないのだからその瞬間の結果だけを見て安易に喜んだり悲しんだりするべきではないという意味の故事成語。